

# 本匠村上津川を訪ねて

矢野 彌生

(会員 佐伯市中山区)

去る七月十三日(木)、上津川の猿谷で、石風呂の復活祭があると聞いて、吉田齋次郎氏の車に林寅喜氏と便乗させて頂いて出かけた。私にとって本匠村の巡検は数年前に佩楯山の化石採集に訪ねて以来だ。とくに、今回の上津川の集落は初めてなので、どんなところか、新鮮な興味が湧く。

八時四十分ごろ、本匠村の中心集落、波寄に到着。すでに史談会員数名が集まっていた(当日十一名の会員が参加)。ここで、矢野徳彌会長代行から本日の日程、石風呂についての説明があり、資料を配布される(深謝)。

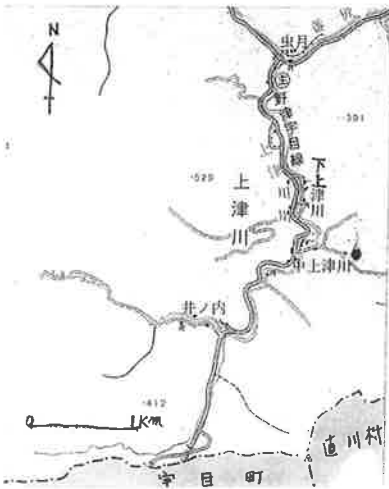
会員一行は目ざす上津川の猿谷の石風呂へ出発。今日は心配された梅雨空も、雨もなく、暑くもない、曇天の

天気恵まれてよかった。

以下、若干の資料をもとに、猿谷の石風呂と上津川の集落の歴史の一端を報告したい。

## 一、清流と猿谷の石風呂

〈地域おこしに活躍する上津川婦人会〉 車は三重弥生線を西へ、小半・井ノ上を過ぎて、板屋の集落、さらに虫月から上津川の清流を望みながら、野津宇目線を南へ二丁ほど行くと、中上津川の猿谷に到着。数戸の人家があるだけの小村、新鮮なうまい空気と静かな山あいの霧



第1図 上津川の位置  
(●印は猿谷の石風呂の場所を示す)

困気は心がなごみ、安らぎを覚える。

私たち史談会の一行が現地に着いたときは、石風呂復活祭が始まる直前であった。石風呂は猿谷の民家のはずりで、道路下の数坪、幅一〇メートルの清流洗う谷川にあった。この猿谷の石風呂は、岩によって自然に形作られたものだった。岩質は番匠帯の硬砂岩と思われる。私にとって、石風呂を見学するのは緒方町の石風呂を見学して以来、二回目だが、実演を見学するのは初めてで楽しかった。大人が五人ぐらい入れる大きさで、戦前はよく使用されたという。

上津川の川野初夫氏(八四)は、猿谷の石風呂の由来や歴史について次のように手記で述べている。

この催しの発端となったのは上津川婦人会員の二、三人が昔から猿谷には石風呂があつて、村人達が病氣又は体の疲れを治すため入浴していたと言うので、どんなものか一度この風呂を沸かして見てはどうだろうかと言うことになる。あちこちで話しているうちに部落の皆さんが一緒に集まってやろうではないかと話がまとまる。

七月九日、全員で風呂場付近の大掃除を致しまし

た。それから七月十三日が大安吉日なのでこの石風呂を沸かす事になり、本日、戦後全く使用しなかった石風呂が復活しました。大正七年(一九一八)七月に祀られた弘法大師像も上の段から見守っています。皆さん、般若心経をあげて石風呂に入り、手足でもつけて病氣の平癒をお祈りしませんか。

また、三城今朝己さんの戦前の話では、この石風呂は以前上下にかなり広場があつて焼いた石を、石甬を入れた石風呂に転がし込んで入浴していたそうです。

この石風呂は弘法大師が大同三年(八〇八)井ノ内長楽寺に佛像を彫刻寄進するため、直川村板が尾峠を越え



石風呂に入れる石を焼く上津川の人々



石風呂の“入り初め”をする  
本匠西小学校の児童



参加者に接待する上津川の婦人会

てこの地を訪れた時、長旅の疲れをこの風呂に入つて癒したという伝説から「大師風呂」ともいわれています。

猿谷の復活祭では、上津川の集落の人々が、まきに火をつけ、岩石を熱して準備。石莖を水に入れて石風呂が完成すると、般若心経を参加者が唱えながら、焼け石を入れ、村の文化財調査委員長の矢野徳彌氏がこれまでの経過と意義を述べたのち、入浴開始。川野初夫さんは「本当に気持ちがいい」と第一声。あと、本匠西小学校

の児童たちが楽しそうに、十人ほどが入り初めをする。

さらに、見学が終った史談会の一行は路上で、上津川婦人会の方々の心暖まる接待をうけ、一同恐縮、感激（お弁当・お茶・御神酒を頂き、記念品として上津川の人が陶芸教室で製作した茶わんを参加者に配布）。

（村の文化財に指定された猿谷の石風呂）  
平成十年（一九九八）六月、本匠村の文化財調査委員長の矢野徳彌氏は猿谷の石風呂について現地調査をしている。また、最近この石風呂は村指定の文化財となっている。

いま、猿谷の石風呂を現地調査をした矢野徳彌氏の「猿谷の大師風呂」（『二豊石造美術No19』大分県石造美術研究会 一九九九・三）をもとに、石風呂の詳細を紹介しよう。以下へゝの見出しを除いてすべて引用。

（昭和十八年ごろまで使用された石風呂） 石風呂はバスの終点「しもこうづかわ」の対岸で、バス停からは二〇〇ばばかりの所にある。

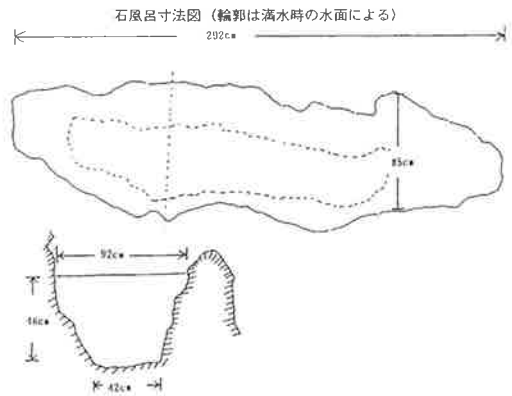
県下の石風呂の遺構の多くが、主として石室を伴うサウナ形式であるのに比べ、この石風呂は、簡単な露天の浴槽形式のものである。周囲の景観がすばらしく、人工の名園の一角にしつらえられた、という感じがする。

中上津川の民家のはずれ、道路下四<sup>ノ</sup>、幅一〇<sup>ノ</sup>ばかりの谷川に、左の山側から突き出た岩が中央まで迫り出した場所がある。この岩の上流側は七<sup>ノ</sup>八〇<sup>ノ</sup>の壁になっているが、下流側は少し平坦で、その中に格好の大きな窪みができている。

この岩の窪みに手を加えて、さらに大きくしたのがこの石風呂で、縦は約二九〇<sup>センチ</sup>、横は中央で約九〇<sup>センチ</sup>、両端近くで約四〇<sup>センチ</sup>、深さは四十五〜五十五<sup>センチ</sup>と、かなり大きな容量のものである。

この石風呂を中心として上下五<sup>ノ</sup>六〇<sup>ノ</sup>ばかりの間、かつてセキシヨウの群落に覆われていた。しかし、昭和十八年（一九四三）の大洪水で失われ、以後再生していないが、最近、村文化財指定とあわせ、復元の話が進められている。

この石風呂がいつ頃作られたものか、はっきりし



第2図 石風呂の構造（矢野徳彌氏による）

ていない。弘法大師が近くの井ノ内薬師を訪ねたとき、ここで湯浴みして旅の疲れを癒したといい、地元では大師風呂と呼んでいる。古老の話では、明治以前から引き続き、昭和十八年頃まで使われていたという。

〈セキシヨウの群落の復活が急がれる〉 この石風

呂を使用していたという人は、村内にまだかなり生存している。その人達によると、使用の仕方は次のようであった。

- ① 大量のセキシヨウを刈り取り、一〇センチくらいの厚さで底に敷き、水を入れる。
- ② 隣接した河原(水面と同じ高さ)に、ミカン大の小石を集め、各家から持ち寄った薪を使って石を焼く。
- ③ 木で作った三つ又や、二つ折りにした竹など使って石を風呂に投げ入れる。
- ④ 風呂ではセキシヨウの成分が溶け出している。水はぬるめで、長く浸る習わしであった。
- ⑤ 湯は灰などで汚れているので、風呂から出ると必ず傍らの流れで体を濯いだ。このため使用の期間は自然と、暖かい時期に限られていた。
- ⑥ 利用者はほとんどが女性で、子供を同伴することが多かった。

このように利用されて来た猿谷の大師風呂・露天の浴槽型石風呂は、前側の川床が少し低くなっているほかは、使用時の原型を完全に保存している。間

題は薬浴に欠かせないセキシヨウの植生であり、石風呂の周辺部に以前の群落の復活が急がれている。

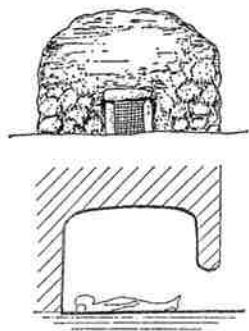
## 二、石風呂の起源と分布

〈風呂は寺院から民間に普及〉 フロはムロ(室)と同義語で、甕(あなぐら)または石屋のことである。一般に日本人は入浴好きな民族であるといわれる。しかし、都鄙を問わず、浴場の設備が発達したのはさほど古いことではない。

元来、日本の風呂は寺院で行われたものが、漸次民間にも普及したものらしい。初めは蒸風呂で、京都の八瀬の竈風呂かまどや瀬戸内各地の石風呂などはこれに属するものであるという。

〈石風呂は瀬戸内海沿岸の西部に多く分布〉

石風呂は石焼きの原理を応用し



第3図 石風呂の構造  
(『日本民俗事典』による)



享和三年（一八〇三）の郷村仮名付帳（佐伯藩政史料）に因尾村の枝郷として上津川村とある。「豊後国志」にも因尾村に属する村として村名がみえる。

文化七年（一八一〇）の家数四〇、人数一八六とみえる（温故知新録）。以上で、江戸期の上津川村の集落規模が推測できる。

佐伯藩では文化九年正月十一日、因尾村に端を發した百姓一揆が起こり、十三日まで破却を伴って続いた。この一揆では、岩井戸村での証文の焼却強制、切畑村での藩側の大筒、小筒による鎮圧で、三人の死者の出たことが特徴であろう。

要求は免、運上、紙勘場、助合銀など十カ条がだされている。そして処分のなかで「過料銀」（罰金）が破却の被害者に配分されている（『大分の歴史』6）。

この百姓一揆で注目されることは、死刑の二人はいずれも因尾村組の文七・杵右衛門で、杵右衛門は上津川村の出身であること、深島への遠島六人のうち五人は上津川の百姓であること、また、保戸島などへの所替八人のうち二人は上津川の百姓であることなど、上津川村の百姓が最も多い犠牲を出していることである。

なぜ、このように因

尾村組、とくに上津川村に特に多い犠牲者が出たのであろうか。これは杵右衛門にみるように、反骨精神と勇氣をもち、先頭に立ち百姓一揆を指導したと考



杵右衛門の供養塔（上津川）

えられる人々がいたからだろうか。幕藩体制下、太平になれて徒食・安逸をこととしていた支配者に対し、非力な農民達の長年にわたる憤懣が、時を得て爆發したのではないか。

それにしても、因尾村の農民のこのパワー（爆發力）は、どこからきたものであろうか。導火線に火をつけることになったのは、八十六年前の享保十二年（一七二六）、同じ所の堂ノ間百姓四十五軒百九十九人が宇目郷酒利村（岡藩領）へ逃散したが、一人も処罰者も出さなかつたという、その大成功がものを言ったのではあるまいか。この百姓一揆加担者として筆頭に挙げられ、番匠川原で処刑された百姓文七はほかならぬ堂ノ間村の百姓であり、

上津川村はその走り百姓の往復した道筋に当たっている  
〔本匠村史〕。

また、徒党を組んで蜂起し、強訴という手段に訴えた  
ことは、いつの時代でも批判されよう。しかし、圧政に  
対して農民が対抗することは、これ以外に方法がなかつ  
た当時、文化九年の百姓一揆も止むを得なかつたとし  
て、この歴史に多くの教訓を学びたいものである〔本匠  
村史〕。

〔過疎化が進行する上津川〕 いま、上津川の集落につい  
て世帯数・人口の推移をみると、昭和三十二年（一九五七）  
世帯数六四、人口三三〇人（男一七三・女一五七）、同  
三十五年は世帯数六七、人口三三三人とピークを記録  
し、昭和四十年代の高度成長期は、どこの農山村にもみ  
られるように世帯数・人口とも急減、世帯数四六、人口  
一九六人となっている。

平成十二年（二〇〇〇）七月には世帯数三四、人口八八  
人と一段と過疎化が進行している。猿谷の石風呂のある  
中上津川は平成十二年七月、世帯数六、人口十六人と小  
村である。

『会員による著書刊行の案内』

大越川流域の民俗と信仰 A5版 一三三頁

弥生町提内

在住の五十川

千代見会員

が、過去一年

間にわたり大

越・岸河内・

寺田・上城・

下城・川原の

大越川流域の  
民俗と信仰

五十川千代見

各地に通い、現地をくまなく踏査して聞き取りする  
と共に、一連の行事には直接参加して集約し、九項  
目にまとめています。

内容は昔から伝えられた数々の民俗行事とそれに  
まつわる話や、今も残る建物や石造物など詳細に調  
べ、百四十八枚の写真の添えて分かり安く説明して  
います。これを読むと、流域に住む人々の暮らしと  
民俗文化が分かる、貴重な一冊です。（林 寅喜）